研究ノート

森 昭 の 問 い
――「教育人間学の構想」まで――

秋 田 英 康

日本の教育人間学のパイオニアの一人、森昭（1915－1976年）は、人間を教育のなかに、そして教育を人間のなかに、生涯、問い続けた[1]。

森昭が出会った「教育」とは一体何であったのか。あるいは、そこで教育への問いがどこまでも問いであり続けたのだから、森は「教育」に出会いきれなかったと理解することもできる。森が出会いそしてまた出会いきれなかった、すなわち森が出会い直し続けていった「教育」とは、一体何であったのであろうか。

本稿は、森昭がどこまでも「教育」に出会い直していく姿を『教育の実践性と内面性――道徳教育の反省』[2]（1955年）に依拠して描き出そうとするものである。

『教育の実践性と内面性』は、戦後、森がデュウイ（Dewey, J.）の教育思想に学び『ジョン・デュウイ』[3]（1951年）、『経験主義の教育原理』[4]（1952年）をまとめた後、やがてそれに満足できず、大著『教育人間学――人間生成としての教育』[5]（1961年）を著すことになるその途上において書かれたものであり、補説として「教育人間学の構想」をその最後に収めている。この著書における森の問いの立て方を検討することで、ほかでもない森自身が「教育」に出会うなかで立てざるをえなくなったその問いを、初発のかたちで描き出すことができると思われる[6]。

1. 「教育」との出会い

森自身の回顧（『教育とは何か――民族の危機に立ちて』[7]、1951年）によれば、森はもともと何よりも学問が好きで、人間を教育することそのことよりもむしろ教育学に興味をおぼえていた、という。ところがあるとき、人間が生きているという事実に心から驚き、そしてまた一人の人間の生活と運命の貴重さを思う気持ちから、森の学問を頂点とする価値体系は転回をはじめた。そしてその心の転回が示す方向を追求しようと手はじめにデュ

ウイの教育思想を選び、多くのものをデュウイから学び、それまでドイツ哲学と京都哲学の立場から教育を考究しようとしていた森は[8]、大きな思想的変化をとげた。しかしその一方で、デュウイによっては満足しきれない何物かを心のすみに残すことにもなった、という[9]。

そして、『教育の実践性と内面性』のなかで、その「何物か」は「人格の内面的自覚」の問題として論じられることになる[10]。「人格の内面的自覚」とは、意志の自由を基に人格の自律を論じたカント（Kant, I.）の倫理学から、森が学びとったものであった。

しかし、カントには現実態に帰る社会的実践性が不充分であると森は考えた。そして、森は、カントの抽象性をのりこえ、社会的実践性と内面的自覚性とを統一することを「私たちの」課題とし、自然・社会・人間を一貫する思想を求めて[11]「教育人間学」を構想することになる。

2. カント倫理学から学びとったもの

森は人間の存在構造に、三つの相をみてとっている。人間は生物として有機体として生きている自然的存在であり、社会の中で文化を営みながら生活する歴史的存在であり、そしてまた自身の判断によって自身の行動を決断することのできる意志をもった人格的存在である。人間という存在にはこのような三つの相が認められるのであるが、これらは実は互いにかなり入り組んでいて、一つの相だけを取り出すことは困難である。人間はこの三相を主体的に統一して生きる存在である[12]。

さて森は、この三相のうち、「人格」についてカントの倫理学に学んでいる[13]。

カント哲学の特徴として、感性や感性的経験に対する理性 ── 先験的自覚的理性 ── の優位があげられる。カントは感性と理性の二元論に立っている。

道徳の世界は、カントにとって実践理性の世界である。実践理性の担い手である人間は、その実践において、自身の内面に自覚される理性の命令にひたすら耳を傾ける。そしてその命令に無条件に服従する。このとき実践理性は外部の感性的なものから完全に独立なものとして、みずから道徳の世界をつくりだし、その実践において道徳の世界を実現させる。

このような主体の意志的信念 ── 内面的自覚 ── によって実現される道徳の世界では、もはや単に理性が感性に優越するだけでなく、理性が感性を一方的に支配する「当為」として自分を押し出してくる。

このようにしてカントは、外部の感性的経験から完全に独立な理性的主観を純粋に洗い

出した。そして道徳から感性的・経験的内容を全く排除し、主観の理性的先験的形式としての道徳法則を、道徳の本質と考えた。

その道徳法則に従う道徳的人間は外部からのあらゆる限定を退けて、自分自身の意志で自分の在り方を決める。これが「意志の自由」であり、そのような自由な理性的意志をもったものとして彼は「人格」であり、自由に自分の意志で自分を規律するものとして、彼は「自律」の主体である。「意志の自由」と「人格の自律」こそは、カント倫理の主体的中核であり、またひろく倫理の主体的中核である。

以上のように考え、森は、次のように決意する。

「私たちはこの真実を、カント倫理から学びとらなくてはならない。」[14]

カント倫理学の問題点

さて、上述のように、森はカントの倫理学に「人格の内面的自覚」を学んだのであるが、森にとってカント倫理学は問題を含んでもいた。実践理性の独立を説くあまり、カント倫理学においては感性的・経験的内容が完全に排除されており、実際に個々の自由の発現を規定する具体的な経験的諸条件――生物学的な条件や経済、政治といった社会的な条件など――が全く考慮されないのである[15]。カントは、経験の具体的事態において遂行される「行為」を、正しく見つめていなかった。

カントは、人間が理性の内なる命令に従って行為することにより自己目的として何ものの限定も受けない自律した人格となることを強調した。カントはそのように自由による自己形成の契機を「行為」にみていたのであるが、しかしカントは同じその「行為」が内なる世界のみならず外界の変化改造をもなす、という面を捨象してしまった[16]。人間の活動は、外物と能動的に取り組んでそれを変化改造するものでもあり、そのようにして外界と具体的に交渉する行為のもつ経験的、実質的な契機を捨象したため[17]、カントは現実態に帰る道に窮してしまった[18]。カントは実際にどのように行為しての変化改造が具体的に個々の自由を実現させるのかを説いていない。

ところで、個々の自由が実現されるとき、それぞれの人格はそれぞれの理性の命令に従う「目的そのもの」である。そして互いが人格として「目的そのもの」であるから、相手を自律的主体として取り扱うべきである。それでは一体どのようにすれば、相手を自律的主体として扱うことになるのであろうか。カントは相手の人格を「尊敬」せよと説くが、ではどのようにすれば、単に口先だけの、あるいは心の中だけの尊敬に終わらずに、実際に人格を尊敬することになるのであろうか。この点についても、カントは全く説明してい

ない[19]。

ついにカントはその抽象性ゆえに、その真実を十分に発揮することができなかった[20]。

以上のように、森はカントを批判する。

3. デュウイの方法

森は、カントが正しく見つめていなかった「経験の具体的事態（concrete situation of experience）」[21]における人間の活動を検討するため、デュウイの方法[22]を試みる。森にはデュウイの方法が他に比べて有効であると思われたからである[23]。

ではそれはどのような方法であったか。それは、「有意味な行動」の発達過程のなかですすめられる人間の道徳的な成長と形成を正しく見つめようとするもの[24]であった。

デュウイにとって「意味」とは、自分がある行動をしようと思う（mean）精神の作用である[25]。

一般に‘meaning’という英語は「意味」と訳されるが、語源的には‘mean’という動詞に‘-ing’のついた現在分詞であり、meanするはたらきをうちに含みこんでいる。“I mean”ということは、a）私があるものを何々であると思うはたらきであるとともに、むしろb）私があることをしようと思う（intend, purpose, project）ということである。a）はあるものを知覚し、判断、理解するはたらきであり、b）は何かを意図して行動を企てたり計画したりするはたらきである。a）の知覚的なはたらきはb）の意図的なはたらき（意思）を通して、具体的な行動へ発展していく。meaningはそのような行動のプラン（plan of action）であり、人はmeaningをプランにして行動する。そして行動してみて自分のmeaningが正しかったかどうかを吟味するのである。

この行動においてその人がなすmeaningのはたらき（活動）が「精神」（mind）である。「精神」は人間が先験的にそなえた既成的実体的な能力ではなく、事物を知覚しその事物にたいして、あるいはその事物を使って、何事かを意図的におこなうことによって、しだいにできてくるものである。人はそういう行動によって、より精神的になっていく。

このような行動の際、ある事物を、他の諸事物とのより広い、より確かな関係において知覚し、この現在の知覚をもとにして、より多くの、またより遠い将来の帰結を考えに入れるようになればなるほど、彼の行動はより有意味な行動に、すなわちより精神的な行動になる[26]。

以上が、森がとらえたデュウイの「有意味な行動」の理論である。この「有意味な行

動」を森は子どもの例で考えている[27]。

四歳の太郎君が六歳の正男君と汽車ごっこがしたいなあと「思い」、正男君を誘いにいく。二人はあそこの砂場で汽車ごっこしたら面白そうだと考え、この「予測」にもとづいて砂場へいき、トンネルを掘り、車掌になり、機関手になりして汽車ごっこをし、その「目的」を達成する。

目的を思い浮かべ自分の態度や行動を決めるのが意志であるから、上の例において二人の有意味な行動は「意志的行動」である。また、目的の予測は知性によってなされるのであるから、上の行動は、多かれ少なかれ「知性的行動」でもある。ところで、知性によって予測され設定された目的の表象によって自分の態度や行動を決めるところに、人間の「自由」がある。ということは、上の例からもわかるとおり人間はすでに幼時から、「自由に行動する者」なのである。カントは人間を「自由に行動（行為）する者」[28]と規定したが、太郎君も正男君もすでに幼稚ではあるが、そのような主体として成長しつつある、といえる。

しかし二人の自由な行動は決して厳密な意味で「理性的」ではない。むしろ「身体的」である。しかしまた単に自然的身体的な行動であるのではない。有意味な、意志的な行動であるかぎり、それはデュウイの意味において「精神的」である。

また、太郎君たちは文化のあらわれである汽車をつかい砂場で一緒に遊んでいる。二人の行動はそのように社会的文化的文脈のなかでおこなわれている。

このように、太郎君や正男君の行動は、自然的・文化的・社会的な生活連関のなかで、自然性・文化性・社会性を、幼いながらも有意味に統一した行動としておこなわれている。このような有意味な、統一ある行動の主体として、彼らは「人格」である[29]。

このような有意味な行動は、子どもの知性の発達と社会的生活経験の発展につれて、その「意味」を深化拡充していく。デュウイはこのような人間の「行動による成長」を、単に子どもにおいてだけでなく、子どもから大人にいたるまで一貫的に究明したのであった[30]。

デュウイへの不満

このように人間の自然性、社会・文化性、そしてデュウイの意味においての「精神」性を一貫的に究明したデュウイの方法は、人間存在の三相を統一的に把握しようと試みる森昭にとって、はなはだ魅力的なものであった。

しかし同時に森は、デュウイに満足できないものを感じている[31]。それは、カントが問

題にしたような本格的な「自覚」の本質を、デュウイが十分に究明していない点に存する[32]。

なるほど確かにデュウイも人間の自覚を見つめている。なぜなら、デュウイが「有意味な行動」というとき、それはほかでもなく自分がとろうとする行動の意味を問題としていたからである。しかしそこでの「自覚」は外部環境と能動的に交互作用をしているかぎりの、その交互作用という一面だけについてみられた自覚であった[33]。デュウイは人間が「自己自身と会話する」という他の一面をみていない[34]。

人間が知覚・行動によって色々な観念を獲得し内面に多くの記号が蓄積されてくると、人間は必ずしも外界の物や人と直接にいつも接触しなくても、自分の内部で、これまでに蓄積された色々な記号（言葉や観念）を用いて、あれこれと思考をすすめることができるようになる。このような、外界から多少とも独立な（全く独立してはいない）「内面」をもってこそ、人間は自覚的主体となりうる。こうした蓄積された記号を用いての「自己自身との会話」こそが「自覚」の基本である[35]。

人間の思考や態度が外界にだけ向かっているあいだは、本格的な自覚はおこりえない。これまで外界にだけ向かっていた思考や態度が自分の内面へ「屈折」reflect され、そこに「反省」reflection がおこり、そして「自分」がはっきりと自覚されるとき、はじめてほんとうの自覚がめざめる。それは外界との交互作用関係から全く切断されたものではないが、しかし個人の思考や態度が外的行動への没頭からいちど解放され、内面に屈折反転されて、「自己」の中心に焦点をむすぶということがないかぎり、自覚というものはありえない。「環境への能動」だけに生きるデュウイ的人間は、「自己への内的焦点づけ」という重要な一点を欠いている[36]。

以上のように、森はデュウイを批判する[37]。

4. 「教育人間学の構想」へ

これまで、森が、カントに「人格の内面的自覚」の問題を学び、デュウイに人間の道徳的な成長と形成を「有意味な行動」の発達過程のなかで見つめる方法を学んだことをみてきた。カントにおいてはその抽象性のために内面的自覚がおこる具体的な事態が十分とらえられておらず、一方でそのような経験の具体的事態を問題にしたデュウイにおいては人間が「内面」をもつという側面が十分考慮されなかった、ということが指摘された。ようするに、森昭にとって問題だったのは、具体的に「有意味な行動」の発達過程のなかで人

間を見つめながら、なおかつその人間の内面の自覚にまで切り結んでいく立場と方法であった。

自己の内面的自覚は単に個人の内面から突然おこるのではない。それ以前には「有意味な行動」が十分に発達していなければならない[38]。しかし、単に「有意味な行動」が発達しているだけでは、ほんとうの内面的自覚がめざめるとはかぎらない。

そこで、内面的自覚と「有意味な行動」の発達過程の関係を考えていくため、森は、「パーソナリティー」をめぐる議論を手がかりにしようと試みる[39]。

「パーソナリティー」とは、森によれば、道徳的・倫理的な意味での「人格」とは違って、事実概念であり、経験科学的概念である。この心理学的な意味での「パーソナリティー」を邦訳する際、森は「人となり」という言葉を選んでいる。それというのも、「人となり」という言葉は、「人となる」経験的発生的過程と、その結果としての「人となり」ということの両方を意味するからである。「人となり」という訳語は、「パーソナリティー」論によって人間を「有意味な行動」の発達過程のなかで、しかもそこに形成される内面に注意しながら見つめていこう、という森の意図をよくあらわしている。

さて、森はパーソナリティーをめぐる多種多様の学説のなかからオールポート（Allport, G. W.）の定義を採用する。それは、次のようなものであった。

「パーソナリティーとは、彼の環境にたいする独自の unique 適応を決定する心理物理的体系 psycho-physical system としての、個人の内部の力学的有機体制 dynamic organization である」[40]

このオールポートの定義のどこに、森は注目していたのであろうか。このオールポートの定義を受け、森は次のように述べている。

「パースナリティーの中心は何といっても、それの個性的な『独自性』であろう。さてこの独自性は、（イ）一方では環境との関係を含み、（ロ）他方では個人自身の心理物理的体系としての面をもっており、しかも両面は力学的に結びあっている。してみれば、パースナリティーは、両面の結びあいに着目しつつ、一方では環境との関係から考察され、他方では個人自身の有機体制として考察できるわけである。」[41]

上の引用のとおり、パーソナリティー論が人間の独自性を、ほかでもないその人自身の内面を構成するその人に固有の心理物理的体系と、もう一方でそれが形成されていく際の

環境との相互作用の両面を考慮しつつ考察していくことができる、という点に森は注目している。

森は多くのパーソナリティー論のうちあるものはその人に固有の心理物理的条件をより重視して研究を進めており、またあるものは環境との相互作用の面である社会的文化的条件の方をより重視して研究を進めている、ということを確認する。そしてまた、パーソナリティーの構造について、あるものはそれがいろいろの「層」からできているという点を強調している、ということも確認する。

森にはこの三つの観点、すなわち心理物理的観点、社会的文化的観点、階層理論的観点を統一する立場が、最も具体的な立場のように思われた。そこで森自身がそのような三つの観点を統一する立場からパーソナリティーを論じようとするのであるが、十分消化しきれないままその叙述をすることになってしまった、と森は告白している[42]。

さて森は、まず階層理論の所説の一つにならってパーソナリティーを生体層と意識層と自覚層（ただしここではデュウイ的な「自覚」を意味している）の三つに大別する。これらの層は一つの心理物理的生命 psycho-physical life の三つの相と考えられるのであるが、それがより発展したものとして精神的生命 mental life を考えることができる、とされる。

ここで心理物理的生命・精神的生命と生体層・意識層・自覚層との関係についてみるならば、心理物理的生命は生体層に根源をもち、しかもその上部は意識層と重なっている。精神的生命は意識層に根源をもちしかもその上部は自覚層と合致している。つまり、人間の心理物理的生命は人間の生物学的・生理的生命にその座をもちつつ同時に心理物理的生命として意識性をもっているのであり、そのような心理物理的生命はその意味作用を発展させるにつれより精神的になっていく。

以上が階層理論的観点と心理物理的観点との関わりであるが、あわせて社会的文化的観点との関わりを、森は次のように考える。つまり、人間の心理物理的生命は自然環境をより直接的環境とし、精神的生命は社会環境をより直接的環境として発達していく、と。実際には両者は厳密に一対一の対応をなしているわけではなく、自然環境と精神的生命の部分的対応、あるいは社会環境と心理物理的生命の部分的対応もあるのではあるが、全体としてはそのような関わりにある、と森は述べている。

パーソナリティー論における心理物理的観点、社会的文化的観点、階層理論的観点、という三つの観点の統一を図って森は以上のように考えたわけだが、心理物理的生命から精神的生命がその意味作用の発展により生成されてくる、という考えは、実はすでにデュウ

イの説くところであった[43]。また、人間の精神的生命が社会環境をより直接的環境として発展するというのも、実はデュウイの説くところなのである[44]。森はデュウイをのりこえるためにパーソナリティーを論じながら、結局デュウイの方法の有効性を確認することになってしまったのである。では森は、パーソナリティー論にデュウイをのりこえる手がかりをまったく発見できなかったのであろうか。いやそうではない。森は次のような記述をしている。

「私は『心理物理的生命』を、さしあたり知覚運動体系として考えたいのであるが、しかし、それにはプラス・エックスがあるように思える。私はまた『精神的生命』をデュウイのいうような考え方を中心に、すなわち自分の行動の意味を知覚する作用をもった生命を中心に解したいのであるが、しかしこのばあいにもプラス・エックスがあるように思える。」

「『エックス』とは何を意味するのであるか。そこには個体の内面にかんする何ものかが示唆されている。――いったい『知覚・運動体系』という概念は、生物（人間）を行動論的に、いわば外部から認識するときの概念である。『エックス』は、まず、かかる外からの行動論的な認識の場には現れない、個体のかくされた『内部』を意味する。（中略）それは、主体としての個体の『深部』に『下意識』として存在しており、個体の意識に十分には現れないもので、これは、実存論的（existenziell）な『エックス』といってよい。」

「右の下意識的深層は、人間の有機的生命に根ざすものであって、また人間の『内面』の生体的（生理学的）基礎をなしている。」[45]

ここで森が問うている「プラス・エックス」は、残念ながら、本書『教育の実践性と内面』においては十分解明されないまま終わってしまうのであるが、しかし上の引用の最後にあるように、森はこの「エックス」が、生物としての人間・人間の有機的生命に根ざすものである、と見抜いている。森は本書におけるパーソナリティー論では十分解明できなかったにせよ、パーソナリティーということにはなにか、その人間個人のかくされた内面に生命の深層のレベルでかかわる問題があると感づいていたのである。森はこのパーソナリティーの「有機体論的」organismic 性格を強調している[46]。

このパーソナリティー論が、本書の要諦である。森は本書をふりかえってこの「パースナリティー論がはなはだすっきりしないものになった。私はそこに最大の不満を感じてい

る」[47]と述べている。そしてこのパーソナリティー論で試みようとした「エックス」への問いが、森をして「教育人間学の構想」に向かわしめることになる。それは、生物学、心理学、人類学、社会科学といった様々な現代科学の研究成果に学びながら、あくまでも内に「エックス」をかかえる「人間」の生成に定位して、その人間生成の哲学的省察を自覚的・方法的に進めていこう、という、途方もない大仕事であった。

✣註

1　「私は（中略）特定の信念というものをいきなり出せない学問的研究を職業にしてきた者でありまして、いわば、結論を出さないで探究に探究を重ねて、問題と取り組んで研究することを一生の仕事にしてきた」と森は述べているが（森昭『教育とは何か ── 現代教育の課題』（開発シリーズ 33）モラロジー研究所編集部編集、広池学園事業部、1973 年、39 頁）、逝去するまでの一生涯、森は人間と教育を問い続けた。

2　森昭『教育の実践性と内面性 ── 道徳教育の反省』黎明書房、1955 年（著作集第三巻）。

3　森昭『ジョン・デュウイ』（教育文庫）金子書房、1951 年。

4　森昭『経験主義の教育原理』金子書房、1952 年（現在は森昭著作集第二巻、黎明書房所収）。

5　森昭『教育人間学 ── 人間生成としての教育』黎明書房、1961 年（著作集第四、五巻）。

6　『教育の実践性と内面性』の序に、「私は本書を私自身のために書いた」（2 頁）とある。本書は、森が教育に出会い、自身のなかにおこった問いに自問自答してものされた著作である。

7　森昭『教育とは何か ── 民族の危機に立ちて』（現代教育新書）黎明書房、1951 年。

8　上掲、森昭『教育の実践性と内面性 ── 道徳教育の反省』、3 頁。

9　上掲、森昭『教育とは何か ── 民族の危機に立ちて』、7－9 頁。

10　上掲、森昭『教育の実践性と内面性 ── 道徳教育の反省』、3 頁。

11　同、49 頁。

12　同、32 頁。

13　同、68－69 頁。

14　同、69 頁。

15　同、76 頁。

16　森昭「カントの教育思想の研究 ── その哲学的背景と批判的再構成」『大阪大学文学部紀要』第四巻、1955 年、274－275 頁。

17　同、278 頁。

18　上掲、森昭『教育の実践性と内面性 ── 道徳教育の反省』、62 頁。

19　同、74 頁。

20　同、67 頁。

21　同、76頁。

22　森はデュウイに「教育や思想や社会を、“人間”の生活と行動に即して理解する方法」を教えられ、「はじめて“いきた人間”の行動と思考のディテールをつかむ方法が分かったような気がする」、と述べている（上掲、森昭『ジョン・デュウイ』、1－2頁）。

23　上掲、森昭『教育の実践性と内面性――道徳教育の反省』、106頁。

24　同、106頁。

25　同、115頁。

26　上掲、森昭『経験主義の教育原理』、81－84頁。

27　上掲、森昭『教育の実践性と内面性――道徳教育の反省』、101頁。

28　森は「行動」と「行為」という概念を区別する。本格的な自覚をともなう自律的な行いを「行為」と考え、それ以前の、あるいはそれ以外の行いを「行動」と考える（同、105頁）。

29　同、101－103頁。

30　同、103頁。

31　「私は本書でデュウイの批判的克服をくわだてている」と森は述べている（同、99頁）。

32　同、103頁。

33　同、115－116頁。

34　ここで森は、「人間は自己自身と会話する」という点を指摘したカッシーラー（Cassirer, E.）に言及しているが、しかしカッシーラーにおいてはデュウイとは逆に「人間は同時に外界とたえず交互作用する」という面が不当に軽視されている、との批判がなされる（同、117－118頁）。

35　同、118－120頁。

36　同、145頁。

37　森は、少年期までの道徳教育の方法としては、デュウイの経験主義の立場をすすめている（同、106頁）。それに対して、ここで問おうとしている本格的な「内面の自覚」は、青年期以降の課題である。

森は、「青年は、性的に成熟するにつれて、文字どおり自身の内部に、未知の、得体の知れない生命のうごめきを、深い不安をもって感じはじめる。そのうごめきが、少年期まで無邪気に外へ向けられていた意識を、自分の内面へとひるがえす」（同、144頁）、と述べている。森は、人間が一面において生物であるからこそまた内面をもつのだ、ということを捉えていた（本稿次節参照）。

38　同、141頁。

39　同、123－130頁。

40　同、124頁。

41　同、125頁。

42　同、124頁。

43　同、126頁。

44　同、127頁。

45　同、125－127頁。

46　同、130頁。

47　同、238頁。

（あきたひでやす　京都大学大学院教育学研究科博士課程）